

ロシア語とロシア文学を三〇年以上勉強してきた。ロシア人についてたいのことはもう知っていてもよさそうなものだが、先日、ごく単純なことで大発見をして、我ながら驚いた。

事情はこうである。私はときおり外国の研究者や作家を呼んで講演会を行うのだが、そういうときはもちろん、案内のチラシを作って、正確な日時と場所を知らせなければならぬ。日本人の聴衆を想定しているから、講演そのものは外国語で行われるにしても、チラシは日本語で済ませてしまうことが多い。ところが、あるときロシア語でもそのチラシを作ろうと思ったって、開始と終了の時刻をどう表示したらいいのか、自信が持てないことに気づいた。いくら私の語学力がたいして高くないとはいっても、開始と終了を意味するロシア語の単語くらいは知っている。しかし、自分の作ったロシア語版チラシを見て、なんだか変な気がしたのだ。つまり、これはロシア語としては正しいのだが、ロシアではこんな書き方をした講演会の告知を見た記憶がないのである。



いったいいつ終わるんだろう？

沼野 充義

プロフィール
1954年生まれ、東京大学教授。ロシア東欧文学専攻、文芸批評家。著書に『徹夜の塊——亡命文学論』（2002年。サントリー学芸賞）、『ユートピア文学論——徹夜の塊』（2003年。読売文学賞）、『世界文学から／世界文学へ』（2012年。以上、作品社）、訳書にレム『ソラリス』（国書刊行会、2004年）、ナゴコフ『賜物』（河出書房新社、2010年）など。

に何十もの告知を探り当てたが、それらを見て自分の目を疑った。そのどれにも開始時刻は書いてあるのに、終了時刻を明記したものは一つもない。違和感はこのから来ていたのだ。しかし、考え込んでしまった。いくら日本ほど時間に几帳面ではないロシアであっても、イベントの終了時刻が分からなかったら、不便ではないのだろうか。あまりにも不思議なので、日本生活が長いあるロシア人に尋ねたら、なんでそんなつまらないことを聞くのかと言わんばかりの怪訝な顔で「ロシア人は終わりのことをあまり気にしない国民だからじゃないかな」と言う。しかし、私はそのあやふやな説明に納得できず、たまたま来日した別のロシア人の大文学教授をつかまえてしつこく同じ質問を繰り返したところ、「終わりの時刻を書くのは、ロシア人の感覚では失礼なことなんだよ」という予想外の自信に満ちた答が即座に返ってきた。つまり、「何時に終わりです」とわざわざ前もって断るのは、その時刻までに必ず帰ってもらいますよ、と言うようなものだから、客を招く態度ではないのである。

なるほど、ロシア人はそう考えるのか！それならこちらでも張り合っただけで開始時刻が書かれていないチラシを一度作って見たらどうだろうか？



1月号目次

- 1 エッセイ 千字文
いったいいつ終わるんだろう？
沼野 充義
- 2 特集
へび
- 3 上方の「巳さん信仰」 田中 励儀
- 5 三線と蛇皮 笹原 亮二
- 6 へびとともに生きる人びと 岩谷 彩子
蛇を好む人びと 堺 淳
- 8 へびとの遭遇 信田 敏宏
権力の龍神と豊饒の蛇神 荒川 紘
- 10 研究フォーラム
ランドスケープの人類学
河合 洋尚
- 12 みんなぱく Information
- 14 地球ミュージアム紀行
エルデニ・ゾー博物館
——モンゴル最古のチベット仏教僧院
小林 繁樹
- 16 連載リレー 知の収蔵庫
CRPS とこんには！ その2
わたしの居場所
菊澤 律子
- 18 多文化をあきなう
みんなぱくを持ち帰ろう
鈴木 紀
- 20 異聞逸聞
世界最長の家系図
韓 敏
- 21 みんなぱく私の逸品
樹皮画(虹蛇)
友永 雄吾
- 22 フィールドで考える
わたしの芸能三番口説(くどうち)
呉屋 淳子
- 24 次号予告・編集後記